

『源氏物語』 須磨・明石の巻と唐代龍女伝・水神説話を巡って

郭 潔 梅

序

「源氏物語」が吸収した中国文学の諸要素は多岐にわたっており、「史記」や白楽天の詩文から素材を取ったり、詩句を借用したりして修辭している。また唐代伝奇の影響も大きいと言われる点があるが、私の興味のあるところでもある。唐代の小説は奇を求める一面があるので、逸聞・鬼・神・狐狸・龍女・水神などの内容が多く、この類の内容も「源氏物語」によく見られる。冒頭の桐壺の巻は、逸聞類の「長恨歌伝」の改作といつてよいが、また夕顔の巻は鬼、妖怪篇である。

須磨・明石の巻は昔から注目され、評判の高い巻である。し

かし最も興味に火を付けられるのは、やはり作者が怪異小説的な手法を用いて描いた須磨の雷雨・龍王の現形・源氏と明石の上との運命的な巡りあわせであろう。

なお、以下に引用する「源氏物語」の本文は、小学館刊「日本古典文学全集」による。また「柳毅伝」「鄭德璠伝」は、「唐人小説」(汪辟疆校録、上海古籍出版社・一九七八年版)による。

一 明石の巻と龍王・水神説話

(ア) 明石の巻は龍王・水神物語である

須磨の巻の終わりに源氏は、「そのさまとも見えぬ人来て、

など宮より召しあるには参り給はぬとて、たどりありく」ところを見て、「ものめでするものにて、見られたるなりけり」と、龍王が自分に目をつけたのだと思ひ込んだ。そのところについて、「花鳥余情」は、彦火火出見尊を源氏にたとえ、明石の上を龍女の豊玉姫に準えていると指摘し、「河海抄」も、明石入道が娘を源氏と結婚させることは、「海宮遊幸」の「海神則以其子豊玉姫妻之」に準えると指摘した。ただし、筆者の言いたいののは、第一に「海宮遊幸」のプロットは簡単過ぎるということ、即ち唐代小説よりも六朝雜談のようなものに過ぎない。また第二に、食い違いはあまりに多すぎること、即ち①明石入道は水神でもないし、明石の上は龍女でもない。源氏と明石の上の愛情物語は、人間の男と龍女の結婚物語であると考へられない。②「海宮遊幸」に須磨・明石の巻にあるような評判の高い暴風雨の場面描写はない。③「記紀神話」における、豊玉姫出産時の現形の場面は須磨・明石巻にはない。④最後に彦火火出見尊は豊玉姫と結婚したが、不幸に別れてしまったことよって、両作品の結末は違う。到底両作品は、同一範疇のものとは見られない。かつて、川口久雄氏は、

唐代伝奇柳毅伝はわが龍宮淹留譚や華嚴緣起の説話との関係はともかく、源氏の明石巻に「海の中の龍王のいといた

くものめでするものにてみられたるなりけり」というのはかかる説話の投影かも知れない。^(注1)

と指摘された。「柳毅伝」は唐代中期の有名な長編龍王説話、或いは龍女伝と言ってもよい。また氏が言われた投影は、やはり「龍女と人間の男柳毅の愛情物語」を指していると考えられる。

さて、龍という想像上の動物は、中国の古い文化である。出土した図案は五千年も前のものもあり、「山海経」等の古籍に文字の記載も種々ある。龍は始めは動物に過ぎないが、時間が立つにつれて、遠古時代の神話の中で、英雄と関係を持つようになり、次第に帝王と血縁関係を持つようになった。

唐に入ってから、龍女伝や龍王・水神説話は六朝のような簡単な奇怪の記載に留まらず、龍宮訪問譚や人間の男と龍女の恋愛小説も出た。小説の舞台は水底、あるいは水辺に設定され、龍王・水神・龍女も、すっかり人間化して物語の主人公になる。水神・龍王・龍女の説話は、中国特有なものではないが、本来中国の遊仙文学から変容したものであると考えられる。近藤春雄氏はつぎのように述べている。

中国の龍女譚なるものは、まさに山中の仙洞譚が水中に転変したものである。思うに仙洞なるものは、本

来道に迷った漁師や何かが偶然出くわした山中の世界の伝承が誇大して伝えられたところに発生したものと云われるが、六朝にはこれに類するものが極めて多く見られる。

このような伝承は、海を渡って日本に伝わる。網野善彦氏も千三百年前、仏教の伝来と共に龍王は水神として日本に登場し、瞬く間に小説の主人公になつた。

と述べている。

以上のことをも含めて、明石の上と源氏との愛情物語の展開する舞台は、海辺の須磨の浦、明石の浦に設定され、源氏と明石の上との、神意よつての巡り合わせ、「龍・蛇・アラス夜行玉」のパターンを活かした技巧などから見ても、作者は腦裏に龍王説話があつて、それを意識しながら明石の上物語を語つたと考えられよう。

(イ) 唐代の龍王・水神説話

唐代怪異小説の素材は仙・鬼・狐・怪について龍王・龍女・海神説話が多い。そのなかで有名なものは、長樹の「柳毅伝」や唐代後期の「靈應伝」、短篇の「李衛公靖」「鄭德璘伝」「張無顔」「洛神伝」などだが、愛情物語と言へば、やはり「柳毅伝」と「鄭德璘伝」くらいであろう。「柳毅伝」は、「太平広記」の第四百十九巻で、作者は隴西の李朝威。唐朝德宗から憲宗(七

八〇一八二〇)に在世したと推定されている。また、「鄭德璘伝」は「太平広記」第百五十二巻であり、両作品を比較するために、先ず概要を紹介してみよう。

「柳毅伝」内容によつて、「柳毅伝」は、前後に大きく分けられ、前半は柳毅の龍宮訪問、後半は柳毅と龍女との結婚物語である。

(A) 柳毅の龍宮訪問 柳毅なる書生は、官吏登用試験に落第、故郷へ帰る前、友人に別れを告げに行く。涇陽の畔を通りかかつたところ、羊を放牧している若い女性に出会つた。雨風に傷つけられて、ひどくやつれているが、その女性をよく見るとなかなかの美人である。毅は怪しみながら、彼女に「なぜこのような仕事をするのか」と聞くと、女性は「自分は洞庭湖龍王の娘だが、夫・姑に虐待され不幸に陥入つている。あなたとは初対面だが、父親への手紙を託したい」という。毅は同情してその手紙を受け取つた。洞庭龍宮に辿りついた毅は、龍王に手紙を手渡した。洞庭龍王の弟钱塘龍王は、姪の不遇な話を聞くと、凄まじい雷雨と伴つて救いに飛び立ち、その婿を殺して、兄の愛娘を取り返した。毅に感謝を示すため、三日の間管弦を演奏し盛大な宴会を催した。

ある日、宴の席上で钱塘龍王は、酒の勢いを借りて、毅に姪

の龍女を嫁がせようとして、殺に迫った。殺は、自分は義侠心で龍女を助けたのであり、夫を殺された人妻を我がものにするわけにはいかないと、固く断った。三日を経て縁談はまともならず、帰ろうとする殺に、龍王は無数の珍宝を贈った。殺は帰った後、もらった土産を少し売っただけで、並びなき金持ちになつたという。これは、明らかに異郷訪問譚である。

(B) 柳殺と龍女の愛情物語―その後、殺は、張氏・韓氏と結婚、つぎつぎと死別の後、家が金陵に移った。改めて後妻を迎えようとしたところ、仲人が「元範陽地方官の娘廢氏は、若くして美貌な未亡人だが、その父親は、道教に専心して名山大川を周遊の後に行方不明。母親は、娘の若さと美貌をあわれみ、立派な男性を見付け嫁に行かせたい」旨を語る。殺は吉日を下して廢氏を娶った。結婚して一カ月あまり、殺は、夜遅く部屋をの妻を見て、かの龍女に似ているような気がした。だが、妻の美しさはそれに勝る。殺は昔の話をしたが、妻は笑いながら「人間世界にはそんなことはあるまい」と答えた。

一年ぐらい立って子供が生れた。妻は、大勢の親類の前で、自分が龍女であることをうち明け、さらに殺に、叔父の錢塘龍王が勧めた縁談を断つた理由を尋ねた。殺は「運命のようだが、當時は義侠心などと理屈ばかり考えて、他を顧るゆとりはなか

つた」と謝り、龍女に「君は今廢氏として、人間界に住み、私は他の女性に心を惑わすところは微塵もない。これからも睦まじく暮らしていこう」と慰め、妻の龍女も感慨無量の涙に暮れた。その後、家を南海に引っ越し、大名も及ばぬ豪奢な生活を送つたが、開元年間に至つて玄宗皇帝が仙道を求め出したため、殺は心が落ち着かず、洞庭湖に帰り、あと消息を断つた。開元の末年に久しぶりに殺は洞庭湖で従弟の前に姿を現した。その姿は以前より若くて素晴らしかったという。以上が「柳殺伝」の大凡のストーリーである。なお、「柳殺伝」は唐代龍王・龍女説話のなかで最もまとまった長編で、後世にも影響が大きく、翻案作も結構多い。

【鄭德璣伝】 真元年間、長沙に住む鄭德璣は、毎年の夏掃省するが、洞庭湖を渡る時よく菱（ひんがし）の実を売る老人と出会う。その度ごとに老人を誘つて「松醪春」という美酒を一緒に飲む。ある年、鄭は長沙への帰途、船は大金持ちの商人韋生の豪華船の隣りに停まった。鄭は隣船の韋生の娘を見かけた。その女性に極めてあでやかで艶やかな肌、しっとりとした髪、まるで波間に浮かぶ蓮の花、露にしっとり濡れた朝顔のように美しい。鄭はすっかり惚れ込んでしまった。

夜になると風が強まり、波も高まった。韋生の豪華船は出発

したが、鄭の船はともその波を乗り越えられない。さて翌朝、鄭は草生の船が家族もろとも湖底に沈んだという噂を耳にした。鄭はしばし呆然として、悲嘆に暮れていたが、夜になって一篇の詩を書き、酒を湖に注いで祭った。その追悼の詩を読んだ水神は心を動かし、草生の娘を鄭徳璜のもとに送り届けることにした。真夜中、船に融れるものがあり、照らして見ると人間らしい。驚いた鄭が救い上げると、それは草氏であった。こうした不思議こそ因縁に違いないと思つて、鄭は草氏と結婚した。その後、鄭は刺使まで出世したという。これは短篇のなかで最も構想の優れた水神説話だと評価されている。もつとも娘は龍女ではなく、ただ普通の人間の女性である。

以上、両作品の愛情物語の部分に着目すると、明石の巻と類似点を有することが分かる。ただ「日本見在書目録」に、この類の作品が舶来された記載がない。そのため、直接の投影があったか否かはともかくとして、「源氏物語」より三、四百年も早く書かれ、広く知られていた同類説話の比較・検討を通して、明石の巻の類型的発想をうかがわせるに十分なものがあろう。

二 暴風雨と龍王

雷雨がないと龍王は天に参ることができない。よつて、唐代龍王・海神の説話には龍王が動くこと必ず雷雨の随伴が特徴となっている。「鄭徳璜伝」に龍王・水神は出ていなかったが、風が強く波も高まった場面があり、「柳毅伝」には凄まじい雷雨の場面描写があつて、一方の「源氏物語」須磨・明石の巻にも評判の高い暴風雨の場面描写がある。まず暴風雨と龍王・水神について比較してみよう。

(ア) 暴風雨の場面

「源氏物語」の作者は、筆墨を惜しまず、須磨の巻から明石の巻にわたつて暴風雨を描写した。三月上巳の日、源氏は家來に勧められて海辺へ磯いそに出て、「八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ」と詠むと

にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。御磯もしはせず
立ち騒ぎたり。肘笠雨とか降りきて、いとあわたたしけれ
ばみな帰りたまはむとするに、
(須磨)

「鄭徳璜伝」は龍王も出ず、簡単に「風勢將緊、波涛恐人」(風が強く、波が高まる)と書いている。一方の「柳毅伝」で

は、赤龍（錢塘龍王）が姪の不遇な話を聞き終わらぬうちに復讐に飛び立ったとき、雷雨を伴ったのである。

語未畢、而大声忽發、天拆地裂、宮殿握蹙、雲煙沸湧。俄有赤龍長千余尺、電目血舌朱鱗火鬣、項翠金鎖、鎖牽玉柱千雷万霆、激繞其身。霰雪兩雹、一時具下（言葉が終らぬうちに、大きな音が急に起つて、天地も裂けんばかりに宮殿は揺れ動き、雲煙がわき起つた。すると、突然千尺にも余る赤い龍が現れた。目は稲妻のごとく、舌は血のように赤く朱の鱗に火のようなたてがみ、首には金の鎖を引きずり、鎖に宝玉の柱を引いている。多量の雷がその身体に激しくめぐり、霰・雪・雨・雹が同時に降る）。

この雷雨の場面描写について、柳井滋氏は、

この凄絶な赤龍のイメージは、源氏と遙かに距たる。源氏は神怪を書いてもそこまでは及ばないのであるが、龍君を人間的に描く点において、かような伝奇小説類と共通すると言え^{（正し）}ばいえる。

と述べている。ただ「人間的に描く」ということは、錢塘龍君の現形と須磨の巻の「そのさまとも見えぬ人」の来訪を指していると考えられ、また雷雨が降る当時、龍王・海神が出ていなかった点は「柳毅伝」ではなく、「鄭德璘伝」に似ている。

（イ）龍王の人間化

「源氏物語」は、龍王を人間的に書くと言つても、実際に出ているとせずと夢にしか見なかった。須磨雷雨の翌朝、源氏はまどろむ時に「そのさまとも見えぬ人」が「など宮より召しあるには参りたまはぬ」といいながら、うろうろと捜し廻っている龍王を夢見した。明石の巻でも「御夢にも、ただ同じさまなる物のみ来つづ、まづはしきこゆと見たまふ」、明石入道も「夢にさまことなる物の告げ知らずることはべりしかば」、この点は唐代龍王・水神説話とはまったく違ふ。

唐代伝奇の中の龍王はすっかり人間化して、現形することはあるが、普通の人間の形をしている。「鄭德璘伝」の水神は「雖白髮而有少容」（白髪があるが、童顔である）、「韋氏視府君、乃一老叟」（韋氏が見た水神は、ただ普通の老人にしか見えない）とあり、「柳毅伝」の龍王、龍女もそうである。毅が荒涼たる野原で出会った放牧している龍女は「牧羊於道畔、毅怪視之、乃殊色也然蛾眉不展。巾袖無光」（羊を道端で飼つているのが目に入った毅は不思議に思ったが、よく見ると、思いの外の美人である。しかし美しい顔ばせには明るさがなく、衣裳にも輝きはなし）という。龍宮に帰つたら、「一人自然蛾眉明瑤滿身」（二人の天性の美貌の持ち主で、全身に飾りを付け

ている。後、毅と結婚した龍女はまったく人間の女性にしか見えない。毅が龍宮に行つて見た龍王は、「一人披紫衣、執青玉又一人披紫裳執青玉、貌尊神溢」（一人は紫の衣を着て青玉を手し、もう一人も紫の袍を着、青玉を手にして、外貌は堂々と精神は廣大である）であつた。

唐代に入つてから龍王も海神・水神として扱われるが、その前は水神は水神であつて、龍は動物であつた。「海神」という言葉は、早くも「史記・秦始皇本紀」に見えはじめ、「始皇夢与海神戰、如人狀。問占夢、博士曰水神不可見、以大魚蛟龍為候」（始皇帝は夢の中で海神と戦い、海神は人の形をしている。始皇帝はその夢を占つた、博士は、水神は現さない、大魚蛟龍が兆候になる）といつた。さて、須磨雷雨の翌朝、源氏を宮へ誘ひに来た「そのさまとも見えぬ人」は住吉の神ではなく、龍王であつた。「源氏物語」は怪異な書き方をしたといつても、唐代の龍王・水神説話とは違つて、「史記」などの痕がまだ残つていると思われる。しかし、事前に布石している若紫の巻で入道が「思ふさま異なり。もし我に後れて、その心ざし遂げずこの思ひおきつる宿世違はば海に入りね。（若紫）」の遺言に対して、皆は「海龍王の后になるべきいつきむすめなり。（同）」といつてからかつたことは、唐代小説の匂いがする。

(ウ) 暴風雨の性質

「柳毅伝」の雷雨は、钱塘龍君が姪を救うために飛び立つ時に伴つた。「鄭德璠伝」の風雨は原因不明だが、そのため草氏及び両親が乗つた船は沈んでしまつた。須磨の巻の雷雨の性質について、昔から種々の見解があつたが、渡辺秀夫氏は、先行研究をまとめて、

具体的に風雷の異変によつて、身の潔白が証明されるといふ経緯は、「準提」を「先例」の応用形態と解する最近の検証を考慮してもなお「史記」本文と整合しないし、より近いとされる「尚書」（金縢篇）にしても、雷風雨の異変があつてから、金縢書を開きて周公の誠真の心を知るといふのであつて、源氏の行文とは一致しない。

と述べている。即ちその雷雨は、「史記」周公旦の故事を踏まえていないし、儒教の聖人を下敷きにもしていない。暴風雨は龍王が起つたと認めた。龍王の役割について、先に引用した、柳井滋氏も、先掲論文で靈驗譚によつて分析している。

住吉の神は、源氏を明石に移し、明石上と源氏を結ぶ。海龍王の役割は不明であるが、源氏を滅ぼす力として働き源氏を追いこむことに意味があつたようである。

氏は、「海龍王の役割は不明である」と述べながら、「源氏

を滅ぼす力として働き、源氏を追いこむことに意味があったようである」と、龍王の役割を指摘している。須磨・明石の雷雨は源氏に襲いかかり、続いて落雷で仮住まいを破壊した。しかし源氏が移住することを前提にして風雨が止んだ。雷雨の目的は、やはり①源氏を須磨から明石へと移住させる。②明石に移住した源氏を明石の上に巡り合わせる——ことにある。龍王は、住吉の神と同じ役割を果たし、源氏を明石へ移住させる展開のなかで、素晴らしい脇役を演じたといえよう。

(エ) 龍王の威力

龍王は源氏に襲いかかったが、なぜ始まった暴風雨が、須磨の地だけでなく、京にも吹き荒れたのか。同時に吹き荒れたものの、須磨と京では様子が違う。二条院からの使者の報告では京の風雨は、

ただ例の雨のをやみなく降りて風は時々吹き出でつつ、日頃になり侍るを、例ならことにおどろき侍るなり。いとかく地の底透るばかりの水降り、雷のしづまらぬことは侍らざりき

(明石)

という。龍王は凄まじい威力を持っている。「柳鞍伝」のなかでもその威力について二回發揮したことがある。鞍が龍女の手紙を洞庭龍王に手渡すと、龍王は、弟の錢塘王に知らせるなど

いった。鞍がなぜかと尋ねると、「昔堯遭洪水九年乃此子一怒也」(大昔堯の九年の洪水は彼の一回の怒りだ)と答えた。この洪水は、中国遠古時代の有名な神話であり、その話だけで錢塘王の凄まじい勢いは十分に示されている。また錢塘赤龍が姪を取り戻した後、洞庭龍王が「殺したのはどのぐらいか」と聞くと、「六十万」と答え、「作物も傷つけたか」の問いには「八百里四方」と、また「情なしの男はどこにいるのか」と聞くと、「食ってしまった」と答えたように、実に凄まじい威力である。須磨・明石の雷雨は京と違う。確かに龍王は須磨で雷雨を起し、源氏に襲いかかり、その余波は京にまで及んだとはいえず、京の雨は当然ながら須磨ほど激しくはない。「源氏物語」の作者が、意識的に神怪小説的な書き方を使って、墨を惜しまず、須磨から明石にまで長々と雷雨の場面を描写したのは、その雷雨を龍王と結びつけて考えさせ、神力を強めて、読者に「運命とは、こういうものだ」ということを示唆する目的があったといえよう。

三 愛情物語の比較

「柳鞍伝」の後半は、「鄭徳璋伝」を下敷きにして書いたとい

われ、これらの説話は互いに何らかの關係があるかも知れない。ともあれ明石の巻と海神・龍王説話・龍女伝との異同はやはり「源氏物語」と「柳毅伝」及び「鄭德璘伝」の三つの作品のなかで比較・検討しよう。

構成上では、三作品はみな異郷訪問のパターンを基本にした内容から始まっている。即ちヒーローはヒロインと出会う前にそれぞれ異郷訪問をしたのである。「柳毅伝」では、毅は龍宮を訪問し、縁談は提起したが、まともらずに帰郷した。源氏はまず異郷の須磨に隠退したが、明石へ移住しても異郷である。

一方、鄭德璘の不思議な縁談も、帰省途中の出来事である。何れも異郷で美女に巡り合わせたのである。この章では、異郷訪問の比較を省き、愛情物語を中心にして比較する。

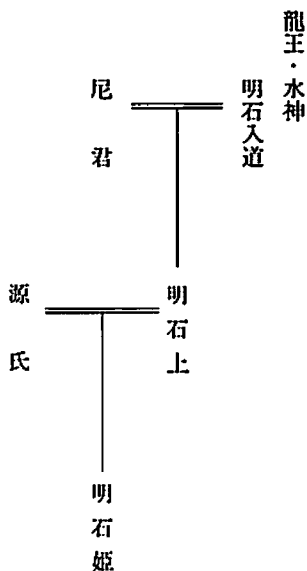
(ア) 人物設定及びその性格

(1) 系図

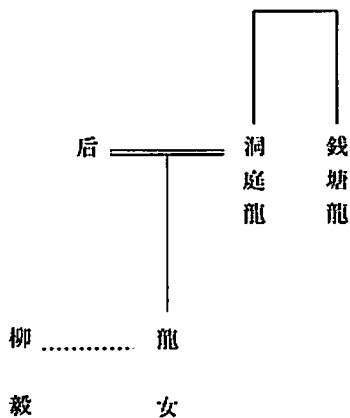
人物設定の系図をみると、「柳毅伝」は龍王がいるが、「鄭德璘伝」は水神がいる。明石の巻は水神も龍王もいる。各家は両親及び娘の三人家族である。

(2) ヒロインの父親

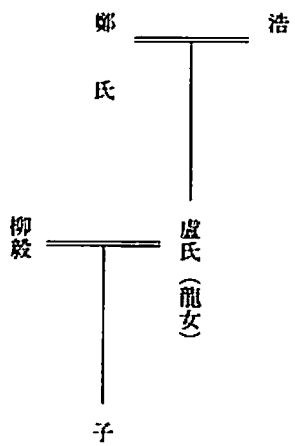
A (明石家)



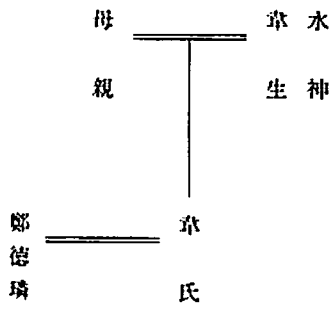
B (柳毅伝)の前半



C 「柳毅伝」の後半



D 「鄭德璘伝」



「柳毅伝」の後半、龍王の妾身である浩は、明石入道の性格や出身などとよく似ている。「柳毅伝」の原文に、

名曰浩、嘗為清流宰。晩年好道独遊雲泉、今則不知所在矣
 (名前は浩という、嘗て清流県宰になった。晩年は道教に専心し、一人で云泉を遊び、今は行方不明)

とある。一方明石入道は

かの国の前の守(中略)大臣の後にて出で立ちもすべりける人の世のひがものにて、交じらひもせず、近衛中將を棄てて、申し賜はれりける司なれど(中略)頭もおろしはべ

りにけるを、すこし與まりたる山住みもせて、(若紫)と記されている。盧氏の父親の浩は、県宰になったことがある

が、明石入道は、大臣の後に地方官になったことがある。浩は道教に専心し、明石入道は仏教の信者である。「鄭德璘伝」の草生は違つて、商売をする大金持ちであり、乗った船は水底に沈んで、それから龍宮に住んで人間世界と同じように生活をしている。

(3) ヒロイン

「柳毅伝」のヒロインは龍女であるが、「鄭德璘伝」の草氏と

明石の上は同じく龍女ではなく、人間の女性である。章氏は一度水に溺れて、水神に生き返らせて鄭のところまで送り届けた。明石の上は水に溺れた経歴がないが、父親の明石入道の「宿世違はば、海に入りぬ」という奇妙な遺言の発想は、章氏の投影かも知れない。もともと人間の女性と龍女と、それぞれがヒーローと婚姻に至る態度は異なっており、それは、やはり時代背景の異なりによると思われるが、以下の通りである。

a 龍女は恩返しのために、柳毅と一緒にいたい。原文には誓報不得其志復欲馳白於君子、偵君子累娶。初娶于張已而又娶於韓、迄張韓繼亡君卜居于茲。故余之父母乃喜余得遂報君之意。度今日獲奉君子、咸濟終世死無恨矣（報恩を誓いながらその志を果たしていないゆえ、かけつけてお話したいと思っていた。ところが、あなたは次々に張家、韓家から嫁を迎え、その果てに次々死別されるに至って、ここに家を定めた。ようやく父母は、あなたに報恩する私の願いが遂げ得ると喜び、そして今あなたにお仕えできた。一緒に立派に一生を送ることができたならば、何の心残りもない）

とある。これは、神怪類小説の一つのパターン・動物報恩譚でもある。

b 「鄭德璣伝」の水神は、鄭と一緒に飲む酒に感謝し、水に溺れた章氏を生き返した。よって、二人は不思議な因縁を思つて結婚した。

c 身分制度の強い平安朝で、明石の上は、「あてにもならないことをあてにしては、却って心配なことを尽くすことになら」と深く考慮して、源氏との交渉を持ちたくなかった。しかし父親の意思に反抗できず、「身の程」を意識しながら、契りをつらな結んだ。

(イ) 女性側からの求婚及び男性側の拒絶

人間男女の結婚は、男性側から求婚することが普通だが、異類結婚の場合はほとんど女性側から求婚する。「記紀神話」も海神は娘を彦火火出見尊に結婚させ、「柳毅伝」も龍女の叔父の錢塘龍王から縁談を提起し、また席上で酒の勢いを馳つて、脅かしながら龍女との結婚を迫った。一方、明石の上は確かに人間の女性であるものの、父親の明石入道は娘を都の貴人と結婚させるため長年神社に詣で祈ったり、直接源氏に話しかけるなど、そのやり方は異類結婚説話のパターンに叶う。なお「鄭德璣伝」はまったく人間同士の結婚であり、女性側からの求婚ではない。

女性側の求婚に対して、男性側は一度断るが、最後はやはり

運命的に契りを結ぶという点は「柳殺伝」と源氏のケースが似ている。殺は、龍宮で龍王の傲慢な態度に反感して断つたが、数年たつてから運命的にまた藤氏と結婚した。一年あまり過ぎ子供が生まれ、殺はますます妻を大事にする。ある日妻は大勢の客の前で、自分が龍女であると打ち明けた。そして殺にかつて結婚を断つた理由を尋ねた。殺は

似有命者、銭塘逼迫之際、唯理有不可直。乃激人之怒耳。

夫始以義行為之志、寧有殺夫婿而納其妻者也（運命のようだね。銭塘龍王に詰め寄つた時、どうも筋の通らぬところがあつたから私は腹を立てて断つたのだ。そもそも最初から私は良い行為をもつて志としており、なぜ亭主を殺してその女房を自分のものにするなどできよう）。

といった。殺は、義侠心のゆえに一度は拒絶したものの、最後は運命的の巡り合わせのもと、結婚したのである。

龍王は雷雨を伴つて迫つたが、源氏はまったく明石へ行こうとしなかつた。その理由は、

「いかにせまし、かかりとて都に掃らむことも、まだ世に救されもなくては人笑はれなることこそまさらめ、なほこれより深き山をもとめてや跡絶えなまし」と思すにも、「波風に騒がれてなど人の言ひ伝へんこと、後の世まで、

いと軽々しき名をや流しはてむ」と思し乱る。

しかし、明石へ移住して明石入道から打ち明け話を聞いた後、自分の過ぎし折りの態度を振り返つてみた源氏は、

横さまの罪に当りて、思ひかけぬ世界に深ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはすればげに浅かならぬ先の世の契りにこそはと、あはれになむなどかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ

（明石）

と前世の縁に気づき、「運命のようだね」と訴えた。こうした感慨は源氏だけではなく、「柳殺伝」・「鄭徳璘伝」にも描かれている。

（ウ）人間の誠意は水神・龍王に通じる

明石入道は娘を都の貴人と結婚させるために、「年に二たび吉に詣でさせ」、結婚出来ぬ場合は「海に入りぬ」という道言まで残した。その強い願望は住吉の神や龍王に通じ、明石入道の祈願を実現させるために雷を閃かせ、大雨で源氏に襲いかかり、落雷で仮住居を焼き尽くし、最終的に明石へ移住させる。

それに対して「鄭徳璘伝」の鄭は、韋氏が水に溺れた噂を耳にして、詩を作り、湖で祭をして哀悼の気持を示した。それが水神に通じ、その真心に心を動かされて、韋氏を生き返られ

結婚させた。この点では、「源氏物語」は「柳毅伝」よりも「鄭德璘伝」に似ていると思われるが、「柳毅伝」の終わりにも「人間の誠意は靈虫に通じ」という言葉を書いている。

(エ) 結婚してから男性の人生が変わる

普通の人間同士の結婚なら、男性の人生は特別な変化がない。しかし異類結婚や神力によつての結婚は、男性の人生を変える。光源氏は、明石の上と結婚してからもまもなく掃京して榮華の頂点に向つた。源氏の掃京は、ほかの要素も入っているが、後に若姫君（明石の姫君）の誕生によつて、源氏一門の子孫の繁栄が続けられる。これは、光源氏と明石の上との運命的な巡り合わせによつて齎らした結果であることは誰も否定できない。一方、柳毅は結婚したのち、龍女は次のように夫にいった

夫龍寿万歳、今与君同之、水陸無住不適、君不以爲妾也

（龍は寿命が万歳だから、今からあなたともそれを享受しよう。水中・陸上どこでも行けない所はない。それをでたらめだと思わないでほしい）

その後、毅は

後居南海、僅四十年、其邸第・奥馬・珍鮮服玩、雖侯伯之室無以加也。毅之族遂瀟澤。以其春秋積序、容狀不衰、南海之人、靡不驚異（南海に住むと、僅か四十年であつたが、

その邸宅・車馬・珍しい器具の類は、大名の家でもこれ以上のものはなかった。年をとつても容貌が衰えないので、南海の人々では、驚き怪しまないものはなかった）。

「鄭德璘伝」の鄭も、結婚前はまったく出世しなかつたが、結婚のあと、つきつき昇進し、ついに州の長官までなつた。

四 結び

以上の比較をしてみると、三作品は、何れも異郷訪問譚のパターンを離れていない。また龍王・水神の力によつての結婚は愛情物語の主幹になつている。「源氏物語」明石の巻は「柳毅伝」や「鄭德璘伝」との間に、何らかの影響関係があることを認めざるを得まい。龍王説話や龍女伝は、間違いなく中国に起源したものであるので、日本へ伝来した記録がないからといって、奈良・平安朝に至つて留学生や留学僧によつて、何らかの形式で伝わつて来なかつたとはいえないだろう。内容的な変更があつても、同じパターンの龍王・水神説話や龍女伝なども長い年月を経て広く流布、浸透した結果、原典を離れたり、誤伝したり、新しい脚色が生まれたりする可能性は大きい。特に文学的効果を高めるために改作される可能性もある。唐代中期に

書かれた「柳毅伝」も、唐の後期になるとその様相を一新した。「靈應伝」に生まれ変わった。元、明に至っても翻案されたり、劇の脚本に改作されたりして、広く一般に知られて来た。明石の巻は、紫式部が唐代龍女伝や水神・龍王説話などから素材を取りながら自己の文学才能を織りませて平安朝物語の舞台に再生したものと見えよう。

(一九九四年九月十五日記)

注

- 1 川口久雄氏「源氏物語の素材における中国伝奇小説その他の投影」(『平安時代文学史の研究』所収、明治書院刊、一九八八年二月)
- 2 近藤春雄氏「唐代小説の研究」(笠間書院刊、一九七八年二月)
- 3 網野善彦氏「瓜と龍蛇 いまは昔むかしは今」(福音館書店刊、一九八九年六月)
- 4 柳井滋氏「源氏物語と靈験譚の交渉」(『源氏物語研究と資料』第一輯所収、紫式部学会刊、一九六九年六月)
- 5 渡辺秀夫氏「漢文伝と史書と物語―(鎌倉の龐太子)・「恒真親王伝」断章―」(『国文学・解釈と鑑賞』一九九一年十月号)
- 6 注4と同論文。